

余がノート(二)

大元茂一郎

三十九

だした。それにつきて餘程注意をして居なくてはならぬことになつたと。

「先生もいひました
「先生たくさんかくのですか」と余が讀方の時間に書取を命じた時尋一生の多くが問ふた。余曰く「ウンさうです。しばらくして「皆さんたくさんかけましたか、石磐をお見せなさいといふと、○村といい、女生、よくも出来面白い生徒……彼れ曰く「ウン出来ました先生出来ました」

そこで余は「女子がウンなんていやですよ」といふと、彼れ更に曰く……「先生も先にウンつていひました」

余はこれによりて教師の一舉一動は彼等の模範たるべくつとめなくてはならぬ。殊に幼年生に於ては……との教訓を得たのである。

一二 とうちやん! そんならこれは?
之れを我朋友にきく。曰く、四歳になる男の兒この智識欲が大分發達して来て色々のことと問ひ

或時も繪本を出して来て一々コレハコレハとその名をきくので最初は一々正直に教へたが、多忙な時にはうるさいといふのでコレハといふと、それはA。コレハ……それはB。コレハ……それはC。かくの如くやつてのけた。所が繪の種類が異つて居た間はA Bで承知してゐたがCがAと同じものであつたので男兒中々承知しないで、Aをまた指して、とうちやん!! そんならこれは? そこでとうちやんは到頭閉口してしまつたとのことである。

一三 アナタふ起きなさい!!

これも前の友達のはなしである。その男兒が父母の言語を模倣すること甚しく時にはふき出すことがあるとのことである。その一例として曰く。
遊んで歸ると母にむかつて「オイ足ふけ」……といふ。オイとは父が母をよぶのをきいてまねたものである。又一日母の命によりてその男兒父の午睡してゐるのを起しに来て「アナタふ起きなさい!!

アナタが起きたさい」といつたさうである。アナ
タとは誰の口調……。

一四

児童の理想とする所誇大なるが通例であつて大將

だとか大臣だとかエライ人だとか隨分氣を吐く
ものであるが、我單級の児童は彼等の境遇上よ
り来るものか氣を吐かがらない。一方からいへば
實着とでもいはれやうが余は意氣なきに力を落す
こともある。彼等の理想とする所は丁稚給仕女
中、女かみゆひ、八百屋……先生先生と意氣昂然
擧手したる男子の答は如何。曰く電車の車掌！。
劣らじとニコニコとして指名を待てる女子の答は
如何。曰く「先生私は米屋の奥さんになります
よ。あゝあはれ。

一五、六ですよ！先生！

尋一生に一二三と常用數字を授け四にうつる時に
四は如何に書くかと問ふと二二とかくと答ふるも
のあるは此迄屢々経験した所である。

此度は如何にと思つて四を授くる時に「皆さん四
といふ字がかけますか」といふと楓葉の如き手を

あげて「先生かけます先生かけます」といふ。
ならはないでも?といふと「先生かけるんです」
そこで二人出して書かせた。一人は四とかき一人
は二二とかいた。

「皆さんどちらがよいのですか」といふと。まちま
ち、級決をすると四の方が多いが多かつた、余も四を探
決した所が二二の贊成者は中々承知しない。

「一は一本、二は二本、三は三本ですから四は二二、
と四本がいいのです」

「先生四は一一一（二）一（三）ノ（四）一（五）一
(六) 一と六になります」

「さうだワ……先生六ですよ！先生！」。

と手を拍つて迫つた。兒軍愛すべし。
後者の六になりますは何故にかく答へしかといふ
に余が文字教授に一晝毎に一二といふ様にとなへ
しめて居る所から來たらしい。

夏季休業が明日からといふ今日例の終業式があつ
た。式後教室で通知表をわたし更に休業中の心得

の概略を念のためくりかへして教室を出して彼等

が帰るのを見送つた。

毎日毎日やかましくいつて居た余も明日からあれないと思ふと何となくかなしいやうで……子供等が「先生さよなら」「先生さよなら」、小さい頭をさげて行くを見ては猶更であつた。

この時尋二の男女一生、余の控室の戸の所へきてブツブツ……「いはうや……」「でもはづかしいも二人が口をそろへて、

「先生ふきんやう。さよなら」といつてニコニコして走つてかへつた。

洗濯の仕方

丸山芳子

一口に洗濯といへば、綿布も木綿も一様に石鹼や其他のものを附けて手で揉むもの、やうに思われるか知らないが、それは決して爾うでない、綿布類のやうな薄い地のものは、爾ういふ事をすれば一度で忽ち地質を傷けてしまいます。でありますから綿布類は手を以て揉むべきものではないと

心得て居れば宜しいのであります。之に反して木綿の類は両手で揉むのでありますけれども、その揉みにも揉みやうがあつて同じ揉みにも両手に餘り力を入れないで、布と布とが軽く當るやうにして揉まなければならぬものであるのに、急に奇麗にしやうと思つて、力任せに揉み方などが何うかするとあるのであります、其様な事をしますれば、垢の落ち方が斑になるばかりでなく、第一自分の手を傷め剩へ布帛の地質を損するから、それを再び衣服等に仕立ますと、何うしても其所から早く破れるのであります、一體洗濯といふものは爾う性急にすべき者ではありません、所が往々之を早くして仕舞つて、次に何々といふやうに焦慮つて、大部當時流行の洗濯板と稱するものを用ゐらるゝやうだが、之を使用するにも敷布とか寝衣とかいふやうなものは關ひませぬが、品によりては決して用ひてはならないのであります、何故なれば、布帛の地質を損するからであります、地質を損すれば、ツマリ三年使用に堪へるものも、一年か半年しか役に立ぬとなるのであります。